九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

課外活動English Speaking Societyに注目したパーラメンタリーディベート経験者のコミュニケーション能力とモチベーション変化に関する研究

上土井，宏太

https://hdl.handle.net/2324/6787691

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式６－２）

氏　　名	上土井　宏太
論　文　名	課外活動 English Speaking Society に注目したパーラメンタリーディベート経験者のコミュニケーション能力とモチベーション変化に関する研究
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　井上奈良彦 副　査　九州大学　准教授　内田　諭 副　査　九州大学　准教授　李　相穆 副　査　名古屋大学　准教授　山形　伸二 副　査　神田外語大学　准教授　田島　慎朗

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、日本の大学の課外活動において ESS と称される English Speaking Society において、即興型ディベートであるパーラメンタリーディベートを経験することによって、コミュニケーション能力と動機付けの観点から参加者にどのような変化が生じたのかを明らかにしたものである。コミュニケーション能力に関しては、コミュニケーション学で広く用いられている 4 つのコミュニケーション指標（Communication Competence、Communication Apprehension、Argumentativeness、Willingness to Communicate）を用いて分析を行い、動機付けの変化に関しては、第二言語習得研究で広く用いられている L2 Motivational Self System 等を用いて明らかにした。

本論文は全 8 章で構成され、第 1 章で研究背景と全体の構成を述べた後、第 2 章では、研究対象とする試合形式のディベートについて、日本に導入された歴史的背景を概観し、本論文で焦点を当てる対象である ESS の成り立ちとその意義について記述している。その後、代表的なディベートの試合形式である即興型のパーラメンタリーディベートと準備型のポリシーディベートの比較を行い、パーラメンタリーディベートの特徴とその経験から得られる効果をまとめている。第 3 章では、ディベート経験による教育効果について、批判的思考、第二言語習得、社会人研修など幅広い分野において、実証研究の不足点を明らかにし、本論文の研究課題であるコミュニケーション能力研究、モチベーション研究に関する必要性を示している。

続いて本論文の中心となる実証研究について、まず第 4 章では、コミュニケーション指標の先行研究を検討し、本研究で検証する仮説、リサーチクエスチョンを設定し、収集したデータの分析結果を報告している。具体的には、(1) 4 つの指標間の相関分析において、今回対象とした日本のサンプルと先行研究で測定されているアメリカのサンプルにおけるコミュニケーション指標間の相関係数の比較を行い、その差について考察を行った。(2) ディベート経験者・未経験者のコミュニケーション能力の差について分析を行い、Communication Competence 以外の指標でディベート経験者の値が未経験者と比べて統計的に有意な差を示すことを明らかにした。(3) 指標の男女間の違いでは、今回対象とした日本人サンプルの男女でコミュニケーション能力について、Communication Apprehension の統計的な有意差が確認され、その差について日本におけるハイコンテクストの文化的背景をもとに考察を行った。(4) 最後に、性別とディベート経験という 2 つの要素を独立変数、コミュニケーション指標の値を従属変数として分散分析を行い、結果の考察を行った。

第 5 章では、コミュニケーション能力とディベート経験の相関について更なる分析を行うため、ディベート経験者、未経験者を対象として 4 つのコミュニケーション指標について一定の練習期間の前後で調査析を行った。その結果、対象とするサンプルのディベート経験年数が短いほど、2 回の測定値の差が大きくなり、ディベート経験がコミュニケーション能力に与える影響がある可能性が示唆された。

第 6 章では、ESS でディベートを行っている学生を対象として半構造化インタビューを行った。その結果を L2 Motivational Self System 及び Motivation Graph を用いて分析し、ディベートを始めた目的や続けている動機付けについて明らかにした。一連の分析により、ESS でディベート活動に参加する学生が学習環境（L2 learning experience）を重要視している点と、部内や外部の大会で目標とするディベーターを見つけることで理想自己（Ideal L2 Self）を見つけている過程について明らかにした。さらに、Directed Motivational Currents のフレームワークを用いて、動機付けの変化と発話されたスピーチの流暢性の関係について分析を行った。最後に、ディベート活動における性別の影響について、実際にディベートを行っている学生にインタビューを行うことで質的な側面からその現状を明らかにした。インタビューの結果、先行研究で述べられている「女性はディベートコミュニティにおいて不利な立場に置かれてきた」という現状について、日本でパーラメンタリーディベートを経験している学生については、そのような状況を感じていない一端が明らかとなった。

第 7 章では、本研究の成果を学術的意義・社会的意義の 2 つの側面から整理し、本研究の限界、今後のディベートを巡る教育・研究の課題と展望を述べている。

試合形式のディベートは世界各地で古くからコミュニケーション教育、市民教育として用いられ、特に英語即興型ディベートは毎年大規模な世界大会が開催されている一方、学術的な研究、特に実証研究は限定的であった。本論文は、そういったディベート活動が活発に行われている ESS の参加者に焦点を当て、コミュニケーション学で広く用いられる指標を用いてその特徴を明らかにした点と、参加動機とディベートの試合で発話されたスピーチの変化を分析した点において、先行研究を超えるものである。本研究は、コミュニケーション学、議論学、英語教育学への学問的貢献のみならず、今後のディベート活動にさらなる学術的根拠を与えるものである。以上の点から、本調査委員会は、本論文を博士（学術）の学位に値すると判断した。